

医療経済学で読み解く医療のモンダイ

真野 俊樹 著

慶應義塾大学大学院教授・経済学

田中 滋

世の中、特に医療人の間では「医療経済」を扱う議論はすべて「医療経済学」に属すると思われるのではなかろうか。本書はその違いを知るとともに、経済学の考え方を学び、専門家や官僚と医療政策論議を交わすための基礎能力を与えてくれる解説書である。

前者、つまり「医療経済論」は、医療費をめぐる論争、医療制度改革のうちファイナンスのあり方、および医療提供体制にかかわる政策論など広範な分野が当てはまる。医療経済論は、医療経済学の技法を使っても使わなくてもこの世に役立つ（役立たない）議論が可能である。ただし実際のところ、経済学の素養をもつ人々にとっては、客観的な理論体系からは程遠く、思いつきを並べているだけとしかみえない粗雑な医療経済論が目立つことも否定できない。

これに対し後者、すなわち医療経済学は、厳密に言えば、経済学分野で発達し、世界中の多くの経済学者に共有されている分析概念や技法をさらに進歩させようとする研究、お

よびそれらを用いた分析のみを指す。こちらは、物理学や一般の経済学と同様、国籍を越えて、専門家によって共通に認知されている分析用具の使用が「医療経済学」と呼ばれるための条件となる。ただし、医療経済を論ずる経済学者の中には、現実の医療経済・制度・政策には全くうとい者も散見される。反対に、医療経済学の研究（主に技法）に時間を捧げつつも、中途半端な医療経済論は語らない、正しく身を律する学者も存在する。

本書では、これまでもたくさんの興味ある医療経営分野の書物を世に問うてきた著者が、以前の『入門医療経済学』（中公新書）の言わば実用編として、短いページ数で重要政策分野をほぼ網羅する見事な腕前をみせ、「医療経済学に基づく医療経済論」を述べたわかりやすい記述を展開している。

第1章においては、日本の医療費および薬価は高いのか否か、患者自己負担と受療抑制の関係、後発品普及の遅さなどのテーマが取り上げられている。続く第2章は、保険制度

のもつ意味合いの説明と、診療報酬支払い方式の様々なパターンを扱う。第3章では、2003年に放映された『白い巨塔』（山崎豊子）の場面の引用という巧みな導入部から始まり、医療提供体制に関する諸問題の経済分析が語られる。最後の第4章においては、海外医療が紹介されているが、比較的良好にする欧米のみならず、シンガポール、タイ、韓国の医療を知ることができ、これからの政策協調を探るために大いに役立つと思われる。以上を読み終えた後に、冒頭に置かれた「医療経済学の考え方」に戻ると、他の科学と医療経済学の比較が簡潔かつ的確に説明されていることがいっそうよくわかるかもしれない。

医師、看護師を始めとする医療職の方々、医療機関経営者、そして医療経済論・医療経済学を目指す学生たちに本書を推薦したい。

● A5 頁232 2008年 定価2,625円
(本体2,500円+税5%)

——医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)